三田青磁の概要

1　沿革

三田焼は、江戸時代後期の宝暦年間に三田市内志手原で陶器を焼いたという伝承がある。

寛政 11 年(1799 年)に三田市内の豪商神田惣兵衛は、京都から陶工欽古堂亀祐（きんこどうかめすけ）を招いて指導を受け、中国風の青磁を主とした磁器を三輪明神窯で生産していた。

特に、青磁は「三田青磁」として親しまれ、江戸、京都、大坂をはじめ全国に流通し、世界三大青磁(中国・龍泉青磁、韓国・高麗青磁、三田青磁)の一つとも言われ、幾多の名品を世に送り出し名を馳せたが、昭和時代の戦争末期に廃窯となっていた。

合同会社三田陶磁社の伊藤瑞宝氏は、平成初年より三田市と共に三田青磁の復興に取り組み、平成 13 年度～平成 15 年度に文化庁国庫補助事業として三田市教育委員会が実施した「三田焼に関する基礎調査・史料調査」にも参画した。

その後も製法復元と研究が重ねられ、当時の技法を忠実に再現した形での青磁製作の復興に至っている。

「三田青磁」製品例

「三田陶芸の森。」にて

三輪明神窯跡出土品

2　製造工程

精巧な「土型」を用いて生産される陶磁器で、主な用途として食器、茶器、花器などがある。

（１）製造工程

（２）三田青磁の特徴

① 原型の元型から「土型」を製作する「土型製作」

② 土型に均一な厚さの粘土板を押し付け成形する「型押成形」

③ 青磁釉を何層にも塗り、完成した際にグラデーションが鮮明に出るようにする。

3　活動母体

合同会社三田陶磁社（三田陶芸の森。を運営【館長：伊藤瑞寶氏】)